

先週私たちは受難週を過ごしました。キリストが私たちのために命を使い果たして、苦難のしもべとして身をささげてつくしくださいました。神の子にそれほどまでにしていただかねばならない、私たちの罪の悔い改めを覚えしました。そしてそれほどまでにキリストに愛され、神に愛されている喜び、そのようにして与えられた罪の赦しの平安を覚えたのでした。そのように受難週というのは、キリストの十字架での死の意味を特別に覚える時であったわけですが、しかしキリストは死んだままではおられないのです。受難週はイースターの喜びへと通じるのです。受難の苦しみは復活の命の希望に通じるのです。

今日はイースターです。イースターはイエス・キリストが墓の中から甦られたことを喜びの日です。キリストが命の力によって、死の力を完全に打ち負かされた、記念すべき勝利の日です。それは私たちにとって、希望の生まれた日でもあります。死で終わらない命がある、死してなお甦る命、永遠の命、キリストを信じる者には、その命が与えられる。その命に生きはじめる。そのような希望が生まれる日がイースターです。どれだけ死の力が圧倒的に見えても、決して絶望することなく、最後は必ず命の力が勝利することを知っている、その希望。その希望の中へと新しくよみがえる日がイースターだと言ってもいい。そういう喜びの日に、こうして多くの兄弟姉妹と共に礼拝できることを本当に幸いに思う。

そしてこのような喜びの日に、洗礼式と信仰告白式があった、私たちの教会に2人の兄弟姉妹が与えられた。これ以上ない、本当にうれしい日です。このような日にどのような御言葉がふさわしいか、本当に迷ったのですが、今日はこのコロサイ書の御言葉を選びました。このお2人に特に覚えていていただきたい言葉だと思ったからです。私自身は残念ながら、自分の受洗日の説教は何も覚えていません。頭がポーっとして夢心地だったように思う。だからお二人も今日はそういう気分かもしれないが、でもできれば覚えて欲しい言葉です。それが1節「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。」

「キリストと共に復活させられたのですから」私たちはキリストと共に復活させられた者である、まずこのことを覚えていていただきたいと思います。キリストを信じると、もう身も心もキリストに委ねた時に、私たちはキリストと共に復活させていただくということが起こる。復活させられるということは、その前に一回死ぬのですね、死ななきゃいけない。で、実は洗礼というのは、そのような死を表すものでもあります。それは古い自分の死です。2:11から13途中「あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、2:12 洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。」またこちらのほうがよりはっきりと分かります。ローマ6:3、4「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。6:4 わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その

死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」このように私たちは洗礼においてキリストと共に死ぬわけです。それは新しい命に生きるため、キリストと共に復活するため、そのために死ぬ。それが洗礼式であります。また信仰告白式というのも、そのようにして自分が死んだということを自分ではっきり覚える時であるのです。だからいわばお葬式です。古い自分の葬式。罪に支配された自分、滅びへと方向付けられていた自分が死ぬわけです。

そのような死は、大変なことです。決して自分の力でなすことができるものではありません、神によって死なせていただくのです。私たちというのは、そうそう簡単に古い自分とお別れできるわけではありません。私たちというのは罪人として生きることに慣れていきますから、そうでなくなるということが想像もできないし、罪人でなくなることを嫌がるという悲しさをもつ。それが罪人でいつづけたいと思うのも、罪人の性質。だから罪に支配されている古い自分を自分で殺すなんて決してできない。キリストなんか嫌いだ、生まれ変わるなんて自分には必要ないという人はもう言うまでもありませんが、生まれ変わってみたい、もう一度新しい自分としてスタートしてみたいという人であっても、なかなか死ぬ決断をすることはできない。キリストの教えはすばらしいなあ、そのように自由に生きてみたい、そう思っても、罪人として生きてきた中で身につけてしまった色んな不自由さやしがらみに心縛られてしまって、やっぱり今のままがいいかなと思ってしまう。でもそんな私たちを神が殺して下さる。もうお前はこれ以上罪人として歩んではならないと、神が力づくで死なせて下さる。キリストと共に、私の罪人を十字架にかけて下さる。

今回受洗準備のあいだ、昭光兄弟が言っておられました「自分には確信がない」。地上の思い患いがいっぱいあるし、イエス様を本当に信じているのだろうかと思う時もある、こんな状態でいいのだろうか・・・。本当に正直な方だと思いました。しかし私は申しあげました。自分の確信は、もうどうでもいいと思ってください。そんなものはあてになりません。問題は昭光さんがどうしたいかではなくて、神が昭光さんをどうなさろうとしておられるかです。今洗礼を受ける、それは昭光兄弟にとって決して最高のタイミングではないのかもしれない、でもそんな昭光さんを、このタイミングで、本当に力づくで受洗へと導こうとしておられるのは神です。それが人間の思いなら道は閉ざされる。私はいつも、間違いなら道を閉ざしてと祈ってきた。でも閉ざされない。この神の導きに身を委ねるかどうかだけ。

本当に人間の確信、決断、覚悟なんてものは一番あてにならないのです。どれだけ信仰に燃えておられるように見える方がいても、私は正直言って全然信用しません。試練でつまづくこともありますし、そういう自分に酔っている人もいます。また認知症やアルツハイマーになって、色んなことを忘れていってしまうことだってある。人間の思いは不確か。あのペテロの場合を考えればよく分かる。他の者が見捨てても、決して私だけは裏切りませんと言い切ったあのペテロが、主イエスを知らないと言ったのですでもそのようなあてにならないペテロが、神の力によって死なしめられて、伝道者としての新しい命へと導かれる。それが聖書から教え

られるペテロのその後の物語です。それと同じように私たちの確信や決断に先立つのも、キリストの決断であり、キリストの確信です。キリストが私たちを救われるべき者だと確信しておられるから、私たちは救われるのです。

そのようにして今日は、神によって、古い自分を葬っていただいた、そのことをはっきり自覚したお二人の葬儀がなされたのです。私たちはみんなこのようにしてキリストと共に死なせていただいたことを覚えます。それはこれほどにふさわしくない、確信も覚悟も足りない自分に与えられた、本当に恐れ多いほどの、かたじけない神様の恵みなのです。そのような恵みによって、私たちは死なせていただきました。新しく生きるために。

そしてそのようなキリストと共に死んでよみがえるということは、別の言葉で言えば、古い自分を脱ぎ捨てて、キリストという新しい人を着ることであります。ガラテヤ 3:27「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」洗礼を受ける、あるいはその恵みを信仰告白によって受け取る者は、キリストの復活の命に結ばれ、キリストを着ることになる。それはコロサイ 3:10に言われることと同じです「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」キリストの命に生きる新しい人として、日々新たにされて、キリストに似せられていく。そのようにして人間の本来の姿である、創造主なる神のかたちを整えられていく。罪によって歪んでしまった本来の素晴らしさを取り戻す。 コリ 5:17「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」

そのような新しい者とされた私たちだからこそ、「上にあるものを求めなさい」と言われます。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。3:2 上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしましょう。」地上のものにではなく上にあるものを見つめて、上にあるものに思いをはせて生きなさいと言われるのです。上には何があるか、そこにはキリストがおられる。復活のキリストが、昨日も今日も明日も決して変わることなく、生きて私たちを導いておられる。そのキリストにいつも思いを向けなさいと言われるのですね。どこまでもキリストから目を離さないで、どんな時もまずキリストを思い出す。やがては滅ぶ地上的なものにではなく、上にある永遠のキリストに思いをはせる。

地上的なもの、それはこのコロサイ書の文脈によれば、5節からに示されているような悪徳のことです。「5 だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。7 あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。8 今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。」この捨てなさいと言われているような罪の現実が「地上的なもの」であるわけです。それは性的な逸脱から他者への悪意に至るまで色々ありますが、結局どれもみんな自分さえよければいいという自己

中心の思いから生まれるものだと言えるでしょう。自分の体を自分のものだから好きに扱う、そうやってみだらな思いのままに体を用いる。あるいは神から与えられた隣人の大切さを思うことなく、自分の感情のおもむくままに悪口を浴びせて恥じることない、そういう自分中心の思いが地上的なものなのです。しかしキリストと共に復活させられた新しい人は、もう自分の人生を自分中心に考えない。いつも上にあるキリストを思い、キリストを中心に考える。キリストならどうするか、私の中でキリストが生きている。どこまでも自分のことをキリストに支配されている者として考えて、そういう者としてそのような地上的な悪徳と立ち向かうのです。自分はもう自分のものではなくてキリストのものとしてされている、だからキリストに与えられたこの体も心も大切にします。キリストが与えてくださった隣人を、キリストが愛しておられる隣人を、キリストの思いで愛そうとする。

そのようなキリストを中心とする倫理がただちに自分のものになるかといえば、残念ながらそうではない。私たちというのは悲しいくらいにそういう悪徳をひきずってしまう、罪人であることに慣れてしまっている者です。私の運転をしている時の姿なんか本当に人に見せられないと思う。しかしそれでも私たちは、洗礼や信仰告白をする前と後では、ほんのわずかであっても違う人間になっている。その違いは、そういう古い自分が全部キリストと共に十字架にかけられてしまっているということを知っているか、知らないか、その分だけのわずかな違い。でも確かに違う人間にされている。そのような罪に支配されていた自分は、もう死なしめられている。そしてキリストを着る、新しい人として、新しい命を始めさせていただいている。この違いを意識して、キリストを中心とする倫理を見につけていきたいと思うのです。

あるいはまたこの「上にあるものを求めよ」というすすめは、どんな試練にある時にも、キリストの愛を見つめて、希望から目を逸らさずに歩みなさいということでもあるでしょう。私たちは地上的なこと、この世的な思い煩いに心縛られる。本当に生きていくというのは大変ですから、色んなことが襲いかかってくる。もうダメだと思うこともたくさんある。しかし上を見上げるならば、私たちには救い主キリストが見える。死の底から復活されたキリストがおられる、私はその復活のキリストの命の力を身にまとっている。キリストによってどこまでも救われている。だから私たちにとってもう、そういう地上のあれやこれやは決して最後のものではないのです。どれだけ私たちにダメージを与えようが、決定的に打ちのめすものではない。死から甦られたキリストに思いを向ける時にそれが分かる。そのような試練は私たちにとって決してマイナスじゃない、それはまぎれもなく「神が与えてくださった試練」であって、キリストの愛に基づいて与えられているのです。必ず私たちの命に通じるものなのです。上にある者に思いをはせる時に、私たちにはそれがはっきり分かるのです。

今日ここに集まることはできなかったが、阿蘇に田上姉妹がいらっしゃる。木曜日に受難週とイースターの恵みを覚える家庭集会を開いてきましたが、その田上さんが言われたこと「先生私は今まで何だかんだ言って地上のことばかり考えてご利益信仰だった。でも十字架という

ことが本当に分かってきた。最近はいエス様が私のために死んでよみがえってくださった、そのことだけを今日も忘れないようにしてくださいとだけ祈っている。その他のことはもう全部お任せして、イエス様に救われたことだけ大事にして。」これを聞いて本当にうれしかった。まさに上にあるものに思いをはせる信仰。揺るぎない希望に生きておられる。キリストを着る新しい人というのは、そういう揺るぎない希望にどこまでも生きる人でもあります。私たちにはどんな時も、キリストと共に死んで復活させていただいた、その絶対的な喜びがあるのです。この喜びをしっかりと見つめながら、地上のあれこれに惑わされること無く、新しい人として歩んでいきたいと思うのです。